

Adjunct Middleの事実観察に関する一考察

小野 雄一

1 本稿は、以下の(1)にあるような中間構文(the middle construction)に関する考察を行う。よく知られているように、典型的な中間構文とされる(1)はおおよそ(2)の解釈が与えられる。

- (1) a. This book reads easily.
b. This book sells well.
c. Greek translates easily.
- (2) a. People in general can read this book easily.
b. They sell this book well.
c. People in general can translate Greek easily.

本稿で着目したいのは中間構文の中でも付加詞中間構文(adjunct middle or pseudo middle)と呼ばれるものである。以下の(3)を考えてみる。

- (3) This lake fishes well. 吉村 (1995)

この文もほぼ次のように言い換えられることができることから、中間構文的であると考えられる。

- (4) People can fish in this lake well.

しかし、(2)と決定的に異なるのは、主語の位置にある名詞句が目的語に相当するものではなく場所を表す付加詞(adjunct)に相当するものであるという点である。

他の例として次のようなものも挙げられる。

- (5) a. This cream polishes well.
b. This pen writes nicely. Nakamura (1997)

Nakamura (1997)によると、adjunct middleが認められるのはinstrument (道具) とい

う意味役割を担う項からでなければならないと述べ、以下の(7)の例が不適格なのは、主語の名詞句がinstrumentではなく、location（場所）であるからだと述べている。以降、(5)にあるadjunct middleをinstrument adjunct, (7)のadjunctのことをlocative adjunctと呼ぶことにする。

- (6) "English allows only instruments to be the subjects of pseudo-middles, ..., and it does not have pseudo-middles with locative arguments.... "

Nakamura (1997:139)

- (7) a. *This bed sleeps well.
b. *This chair sits nicely.

このことは、以下の(8)に示すように同じ動詞であっても主語に上がるのがinstrument かlocation かで文法性が変わってくることからも、妥当性が得られるとされている。

- (8) a. Tom wrote with this pen in the dining room.
b. This pen writes comfortably.
c. * The dining room writes comfortably.

従来の研究におけるadjunct middleの扱いは(6)に挙げたNakamuraのような事実観察を元に構築されていると言える。つまり、事実観察上、locative adjunctは英語では認められないということである。この立場に立つと、上の(3)のようなデータは極めて厄介な問題となる。(3)に関する従来の見解は、①一般にlocative adjunctは不適格である、②(3)のようなデータは極めて例外的（あるいは慣用表現的）である、③よってこの問題はより抽象的な統語論・意味論等で扱うものではなく、usageに近いレベルで説明すればよい、という論理である。しかし、locationを主語にしたadjunct middleが完全に不適格なのかとなるとそうでもなさそうである。他の例を次に挙げたい。

- (9) a. This chimney draws badly.
b. Lake Wakana and Hawea still continue to fish well despite the recent spells of heavy rain and rising lake levels. 吉村 (1997)

さらに、他の言語を考えると、locative adjunctを積極的に否定する理由も見えなくなる。下の(10)はドイツ語、(11)はオランダ語、(12)は日本語、そして(13)は不適格な英語

- (10) a. In diesem Bett schläft es sich gut.
 in this bed sleeps it itself well
 b. Auf diesem Sessel sitzt es sich bequem.
 on this chair sits it itself comfortably (Sakamoto 2001: 106)
- (11) a. Dit bed slaapt lekker.
 this bed sleeps comfortably
 b. Deze stoel zit lekker.
 this chair sits comfortably (Ackema and Schoorlemmer 1994:82)
- (12) a. このベッドがよく眠れる.
 b. この椅子は気持ちよく座れる.
- (13) a. *This bed sleeps well.
 b. *This chair sits comfortably.

このように見てみると、英語では何らかの理由でlocative adjunctが難しくなっている傾向があるという点は認めるにしても、より抽象的な普遍原理に基づいてlocative adjunctを認めないとするのは、他の言語の適格性を説明するという大きな負担を背負うことになるので、できれば避けたいと考えたい。

本稿では、中間構文に関する主要な研究であるNakamura(1997), Taniguchi(1994)のadjunct middleの扱いについて概観し、上記の観点から問題点を明らかにする。そして、①英語においてlocative adjunctが認められるのはどのようなときか、②①の結果上記の先行研究にどのような修正が必要となるのか、を中心に議論してきたい。

特に、locative adjunctの詳細な事実観察については従来の研究であまり扱われていなかった。ひとつには文法性の判断において話者によって大きなばらつきがあったというもある。本稿ではinformant調査に基づいて、可能とされる文の特徴を明らかにしてきたい。

2 Nakamura (1997)は統語的にadjunct middle を扱っている。中村の分析の特徴は以下の通りにまとめられる。

- (14) "Middle Formation is a semantic passivization which applies in lexical semantic structures." (p.140)
- (15) • middles as NP movement
 • English, like Dutch, allows Function Composition at Lexical Conceptual

スペースの都合により詳細な理論背景などの説明は割愛し、本稿と直接関係するポイントを簡潔に述べたい。Nakamuraは英語のadjunct middleを説明するために、先ほど触れたオランダ語の例(11)を説明するためにAckema and Schoorlemmer(1994)が提案したSemantic Restructuringというメカニズムを英語に当てはめる。このメカニズムは語彙概念構造において2つのFunctionを融合させるものである。

(16) Semantic Restructuring

$[_{EVENT} \text{Function } [_{Place/Instr} \text{Function } [_{Thing}]]] \cdots \rightarrow [_{EVENT} \text{Function-Function } [_{Thing}]]$

(17) (11a): $[_{EVENT} \text{SLEEP } [_{Place} \text{IN } [_{Thing} \text{BED}]]] \cdots \rightarrow [_{EVENT} \text{SLEEP-IN } [_{Thing} \text{BED}]]$

上でも述べたとおり、オランダ語ではinstrumentばかりでなくlocationを主語にしたmiddleも可能なために、(16)にある第2番目のFunctionをPlace/Instrumentと規定している。しかし、英語において認められるのはinstrumentのみであるという事実観察に基づき、Nakamuraは第2のFunctionをInstrumentと仮定している。これにより、locative adjunctは原理的に排除できることになる。

(18) This pen writes easily.

- a. $[x \text{ WRITE } y [_{Instru} \text{WITH } [_{Thing} \text{PEN}]]] \rightarrow$
- b. $[x \text{ WRITE-}y [_{Instru} \text{WITH } [_{Thing} \text{PEN}]]] \rightarrow$
- c. $[x \text{ WRITE-}y\text{-WITH } [_{Thing} \text{PEN}]] \rightarrow$
- d. $[_ \text{BE WRITTEN-}y\text{-WITH-BY-}x [_{Thing} \text{PEN}]]$

3 一方Taniguchi(1994)は認知言語学的にadjunct middleを説明しようとした。彼女が立脚したのはLangacker(1990), Croft(1990)によって提案された「行為連鎖(使役連鎖)」というモデルであった。このモデルのポイントは、「行為者が、道具を使って、対象物に働きかける」という事象と、何を浮き出しているのか(profiling)が、能動文、自動詞文、中間構文、instrument object文の基本型をなしているという点である。(19)aからdとそれぞれの構文があるが、いずれも基本はAG(Agent), INSTR(instrument), PAT(Patient)を連鎖の構成素としたモデルで、それぞれの構文は(20)の太丸で示した構成素を浮きだした結果生じた構文であると考ええる。

- (19) a. Floyd broke/hit the glass with the hammer.
 b. The hammer broke the glass.
 c. The glass (easily) broke.

d. Floyd hit the hammer against the glass.

(20) AG INSTR PAT

a. ○ ⇒ ○ ⇒ ○ →

b. ○ ⇒ ○ ⇒ ○ →

c. ○ ⇒ ○ ⇒ ○ →

d. ○ ⇒ ○ ⇒ ○ →

Taniguchi (1994:177)

さらに、中間構文はunderstood subjectの特性から、以下のようなモデルとなっているとし、(19)と同様に同じモデルから派生していると主張している。

(21) The door opened only with difficulty.

(22) AG MV

⊙ ⇨ ○ → ⊠

Taniguchi (1994:178)

このモデルを仮定すると、instrument adjunctは自然に説明できる。つまり、AGの直後にINSTRを想定しているモデルであるために、locationではなくinstrumentが主語になる資格があるという具合である。このことについてTaniguchiは以下のように述べている。

(23) "Clearly, the instrument lies between the Agent and the Mover in the action chain, transmitting energy from the Agent to the Mover, ... the Instrument-subject middle conveys a conceived event where a property of the Instrument serves to facilitate or resist the energy from the non-specific Agent." (p.184)

4 大ざっぱではあるが2つの主要な先行研究のポイントを概観したが、これらの分析では(3)の取り扱いは問題になる。Nakamuraの枠組みではSemantic Restructuringのターゲットになるのはinstrumentであってlocationは外れている。また、Taniguchiにとってはlocationという項をAGの直後に想定するのには無理がある。よって、これらの枠組みでlocative adjunctを説明するためには何らかの修正が求められる。

まず、英語のadjunct middle の事実観察についてデータを加えて検討していきたい。

(3)のfishの例を考えてみる。

(24) This lake fishes well.

FISH + [THING a fish] + [AT this lake]

本稿では(24)のthis lakeをlocative adjunctと考えているが、この例に関して次のような分析をする文献がある。

- (25) 「fish this lakeという釣りをする場所を目的語にした他動詞構文に由来しているとも考えられる」
(松瀬・今泉2001:207)

この分析が正しければ、(3)の例はfish this lakeという能動文の直接目的語が主語のなった通常の間接構文と言えることになる。しかし、次のような例を考えるとこの分析が妥当であるか、疑問を投げかけることになる。

- (26) This chimney draws badly.

DRAW + [THING air/smoke] + [INTO/OUT OF this chimney]

- (27) ?? Tom tried to drew the chimney freely.

drawもfishと同様に他動使用法がある動詞であるが、(26)に対応する能動文でlocationにあたる語を目的語におく表現はすわりが悪い。よって、本稿では(24)で示す通りthis lakeをlocationと考えることにする。

動詞fishに関しては、以下のようにinstrument句がついたり、instrument句がついても場所句がついたりするとすわりが悪いようである。そして、(25c)のように、余分な付加詞がつかない場合に認められるようである。

- (25) a. ?? This lake fishes with this rod and reel easily.
b. ? This rod and reel fishes beautifully at this lake.
c. This rod and reel fishes beautifully.

つまり、本来主語にある名詞句の特性を描写するという機能を持つ中間構文において、主語と動詞句のみでその描写しようとしている状況がある程度予測できないと文としても成り立たなくなるというのがあるようである。よって、(25ab)の不適合性は二重目的語構文からの中間構文や、argument性の強い前置詞句が伴う中間構文が認められないのと通じる。

(3)の例文がなぜ話者によっては言えるのかという問に関しての我々の見解は次の通りである。fishという動詞は元来動作種の主語とfishという行為の対象となる目的語（通常は魚）、および付加的な場所前置詞句をとる通常他動詞である。この状態で、表面上には現れないが主語の行為者名詞句が特に不特定なものと解釈され、さらに目的語名詞句に関しても限定せず（つまりどのような魚がよくつれるのかというのは問題にしない）に、この湖の特性を描写する表現を意図したときにadjunct middleが発生する、

ということである。

- (26) [Agent] + FISH + [THING a fish] + [AT this lake]
 → × → apparent or predictable

上記の見解が正しければ、英語で adjunct middle が認められるためにはまず動詞が他動詞である必要があるのだが、この点は以下に挙げる自動詞文からの adjunct middle が一切認められないことから納得できる。

- (27) a. weep at the news [at the funeral, at the sad story, at someone's death]
 b. sit [on the chair, under the tree]
 c. sleep [on the bed, in the dark room, on the second floor]
 (28) a. * The funeral [The sad story, Someone's death] cries easily
 b. * The chair [The tree] sits comfortably.
 c. * The bed [The dark room, The second floor] sleeps nicely.

また、他動詞文からの instrument middle が英語では一般的には可能である点は先に触れた通りであるが、自動詞文からの instrument middle は(28)と同様に無理のようである。

- (29) a. * This handkerchief cries nicely.
 b. * This stick sits (on a chair) easily.
 c. * This blanket and pillow [This medicine] sleeps nicely.

locative middle についてさらに次の点を述べたい。一般に不可能と言われている locative middle も状況が整えば、容認度は上がるようである。次の例を参考にして欲しい。

- (30) a. play baseball [tennis, soccer] in the park
 b. * This park plays nicely.
 c. ? The Saitama Stadium plays comfortably.
 d. ? The Safco Field plays wonderfully.
 e. This tennis court plays well.
 f. This green plays badly.

つまり、よく非文法的であるといわれている(30b)に関する問題の本質は、この文に接した際、「何のプレーが、誰が」という状況がはっきり見えてこないということである。もしこれが(30c)のようになると、「サッカーの選手が、サッカーのプレーを快適に行う」という解釈、(30d)だと、「イチローのような野球選手が華麗なプレーをする」という解釈、(30e)では「テニス」、(39f)では「ゴルフ」といった具合に具体的な状況がわかる分、容認度が上がっているのではないかと推測する。つまり、locative adjunct内の名詞句が主語になっているから中間構文が認められないというのではなく、instrument middleと同様に、locative middleも状況が整えば原則としては可能である、という事実観察を基本として、文法理論を構築する必要がある。

以上をまとめると、次のようになる。

- (31) ・ The middle formation applies to transitive verbs. It is impossible for an adjunct with an intransitive verb to be in the subject position.
- ・ When adjunct middles are possible, the logical object of the original transitive verbs are predictable or apparent from the situation in which the sentence is uttered although the logical object does not appear at the surface.
 - ・ The fact that English allows only instruments to be subjects of adjunct middles is a factual tendency, but it is possible for locative PP to appear in the subjects of adjunct middles if the conditions are met.

5 ここまで見てきたとおり、adjunct middleは特にinstrumentに限定されるものではない。となると、先に見てきた2つの先行研究の枠組みにおいてどのような修正が必要となるのか。NakamuraはSemantic Restructuringというプロセスを想定し、中間構文においては、EVENTとINSTRUMENTをrestructureさせる仕組みを考慮した。しかし、locative adjunctも可能であるとなると、オランダ語の場合と同様にEVENTとPLACEをも融合できる仕組みにしておくことがまず必要になる。

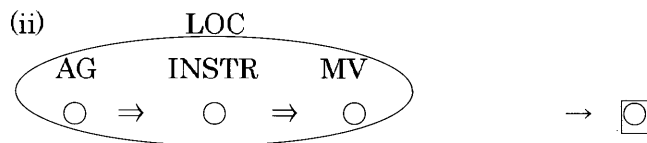
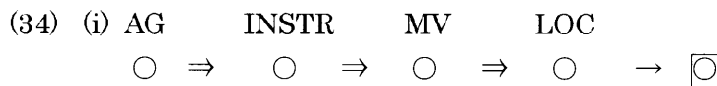
(32) [_{EVENT} Function [_{Place/Instr} Function [_{Thing}]]] → [_{EVENT} Function-Function [_{Thing}]]

- (33) a. [x FISH y [_{Place} IN [_{Thing} LAKE]]] →
 b. [x FISH-y [_{Place} IN [_{Thing} LAKE]]] →
 c. [x FISH-y-IN [_{Thing} LAKE]] →
 d. [___BE FISHED-y-AT-BY-x [_{Thing} LAKE]]

オランダ語のlocative middleは英語のlocative middleと比べて容認の幅が広いという事実に対しては別の手当が必要となるが、さしあたりlocative middleの可能性を残すモ

デルである必要がある。

また、Taniguchiにとっても同様な処置が必要となる。Taniguchiが想定している *billiard-ball model* では *location* という項を想定していないために、このままでは *locative adjunct* 内の名詞句が主語の位置に昇格させることができない。少なくとも、*billiard-ball model* から原理的に導き出せるようなもので、*locative middle* において *locative adjunct* 内の名詞句が適正に *profile* できるようなモデルが必要となる。私見では次のような提案が可能と思われる。



(34i)は力の伝達がMVからそのMVが存在している環境（つまりその場所）へ向かうことを想定したモデルで、AG, INSTR, MVのどれも *profile* されない場合にはLocが主語の昇格できるようにしている。一方、(34ii)はAG, INSTR, MVが起こっている環境全体をとりあえずLOCとしてとらえ、AG, INSTR, MVのどれも *profile* されない場合にはLOCが出てくるようにしている。どちらをとるにせよ、今提案したような修正を行うとするならば、それが *adjunct middle* を説明するだけのためのものではなく、言語現象全体からみた十分な動機付けが必要であることには違いない。*locative adjunct* を阻止しないシステムと、*adjunct middle* 内の容認性の問題を同時に扱えるバランスのとれた文法理論を構築していく必要がある。

References

- Achema, P. and M. Schoorlemmer (1994) "The middle constructions and the syntax-semantics interface." *Lingua* 93. 59-90.
- 阿部泰明(1991) 「この本はよく売れる」中間構文に関する一考察 『言語理論と日本語教育の相互活性化』 76-89 津田日本語教育センター
- Croft, William (1990) "Possible Verbs and the Structure of Events, " *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, ed. by Savas L. Tsohatzidis, 48-73, Routledge, London.
- Fagan, Sarah (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Fellbaum, Christiane and Anne Zribi-Herts (1989) *The Middle Construction in French and*

English. Indiana University Linguistics Club, Bloomington.

影山太郎(1996) 「動詞意味論--- 言語と認知の接点」 くろしお出版

Langacker, Ronald W.(1990)"Settings, Participants, and Grammatical Relations" *Meaning and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, ed. by Savas L. Tsohatzidis, 213-238, Routledge, London.

松瀬育子・今泉志奈子(2001) 中間構文(第7章) 「日英対照動詞の意味と構文」
影山太郎編 大修館書店

Nakamura, Masaru (1997) "The Middle Construction and Semantic Passivization" *Verb Semantics and Syntactic Structure* ed. by Kageyama, Taro. Kuroshio Publishers. Tokyo.

大矢正明(2000) 認知意味論と中間構文---ドイツ語と英語の差異をめぐって
「ドイツ文学104号」 42-52

Rizzi, Luigi. (1986) "Null objects in Italian and the theory of *pro*" *Linguistic Inquiry* 17. 501-557

Sakamoto, Maki (2001) "The middle and related constructions in English: a cognitive network analysis" *English Linguistics* 18: 1. 86-110

Taniguchi, Kazumi (1994) "A Cognitive Approach to the English Middle Construction" *English Linguistics* 11 173-196

寺村秀夫(1982) 「日本語のシンタックスと意味 I」 くろしお出版

吉村君宏(1995) 「認知意味論の方法：経験と動機の言語学」 人文書院

「受理年月日 2004 年 9 月 30 日」